

# 愛しい人「紫」に例え

文人の  
武蔵野

「万葉集」の東歌に「紫草は根をかも終ふる人の児のうらがなしけを寝を終へなく」という歌があります。

むらさき（紫草）はその根をおしまいまで染料に用いて使いおすというが、私はあの子がこころ愛しいのにまだ共寝を果たすことができないでいるという意味になるのでしょうか。植物のむらさきの

村上春樹 ⑮



あきる野市の小峰公園で観察される薄紫色のスミレ（今年3月撮影）「公益財団法人「東京都公園協会」提供

用途を伝えながら、それにこよせて懸想する相手と添い遂げることができずにいるこ

とに対する嘆きを歌っている。

東歌ですので、常陸、相模、武蔵、信濃などをはじめとする東国、武蔵野一円がこの歌の舞台だと考えられます。

ところが「万葉集」には、

武蔵野以外の紫草も詠まれています。雑歌には、額田王の「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」があり、それに対する大海人皇子の「紫のほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも」があります。

成就しない恋愛を歌うこれらの贈答歌は、近江の「蒲生野」の「紫野」（天皇家の紫草のための禁野）で詠まれました。しかし実際には、紫草

の生産地の中心は武蔵野であり、近畿地方ではなかったと言えるようです。

古今和歌集には「紫のひととゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」という歌があります。また伊勢物語には、「紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける」という歌に「武蔵野の心なるべし」と付された箇所があります。

どちらの歌も、一本の愛すべき、美しい紫草が咲いていることによって、はるか一面にみられる他のすべての草木も大切に見える、といった意味を表しています。「紫」を愛しい人と置き換えて解釈できます。

万葉集の時代に「あかねさす紫」が言挙げされ、平安朝の時代になると「紫」の歌枕（名所）としての「武蔵野」が登場することになります。

村上春樹の両親は国語教師でした。こうしたことを理解した上で「スプートニクの恋人」を書き、「武蔵野」の「すみれ」を造形したと考えるとどうなるでしょうか。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）  
（敬称略）

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。